

危機の時代に読む『不如帰』

高橋 修

「不如帰」が連載された「国民新聞」は明治二十三（一八九〇）年二月一日に創刊された。いうまでもなく、徳富蘆花の兄徳富蘇峰の手によるものである。同じ民友社から刊行され、めざましい成功を収めた総合雑誌「国民之友」（明治二〇（一八八七）年二月〜三一（一八九八）年八月）の勢いを駆って、「新聞其物をして社会の生活と一致合体せしむる」というよりリアルな社会との結びつきを求めて発刊されたとされる。のちの蘇峰の回想によると、「初号発刊の際に於ける、予の心持ちは、「国民新聞」をして、政治、文学、宗教、技芸、其他精神的にも、物質的にも、国民の凡有る生活に關心を持ち、その生活に必須の機関たらしむるにあつた」（『蘇峰自伝』中央公論社、一九三五年九月）という。「平民主義」に基づく、新たに立ち上げられた「国民」のためのメディア創設という「国民之友」の理念が引き継がれていた。創刊当初の発行部数は七〇〇〇部と好調な滑り出したといえる。

中心となった理念は、「田舎紳士」に代表される「自活自立」の「農工商の人民」からなる「中等民族」こそ時代の担い手であり、

「形成されるべき「国民」の中核」（有山輝雄）であるという認識に基づく「平民主義」で、藩閥体制の上から抑えつける開化政策に対抗する「平民」の側の原動力となるべきものであった。こうしたリベラルな民権論は、旧世代に対抗する新世代の知識階層に受け入れられ、明治二十年代は「蘇峰の時代」とされるほど、言論界に広汎な影響力を持つに到った。それは、若き日の二葉亭四迷が蘇峰に送った熱烈な書状にも表れている。

しかし、その論調はのちに大きく変貌する。それは、日清戦争後からとも、日清戦前からともされる。米原謙によれば、蘇峰の二元論的な政治観、スペンサーの社会進化論に依拠する歴史観が凝縮されてきた最初の著書『将来之日本』（明治一九（一八八六）年）のなかにその萌芽が認められるという。蘇峰が構想する「将来の日本」は「農工商の政治的成長によって出現する「中等民族」が、士族に代わる政治的担い手」となり、自由党と改進黨の「進歩党連合」による平和的で平民主義的な政治体制が夢想されていた。しかし、こうした「中等民族」による「国民国家構想」は、地価修正案をはじめめとするさまざまな現実的、政治的な利害が交錯するなかで行きづ

まった。その時、蘇峰の目に見えてきたのが、「帝国主義」という新たな「世界の大勢」であつたとされる（米原謙「初期蘇峰と「平民主義」の挫折——再編成される模本会社法からの示唆」「立命館法学」二〇〇六年六月、二七四号）。論調は、農村と都市の商工階層の連合による「生産主義」から「力」による国権論的な「膨張主義」の方へ一気に傾いていった。政治状況の急激な変化に蘇峰の国民国家構想が自壊していったといえよう。

とりわけ蘇峰の思想的変貌の契機となつたのは日清戦争後の日本を取り巻く国際情勢にあつたと考えられる。朝鮮を自国存立のための利益線とする日本は、条約改正問題などの国内的な事情に押されるように、朝鮮に対する宗主権の維持を図る清国の排除を目的として朝鮮に出兵する。その目的を達したあとも攻勢を続け、朝鮮の獨立維持を理由に清国内に派兵し、外戦の準備ができていなかった同国から勝利を収めた。この結果、一方的な講和条約によつて、遼東半島、台湾、澎湖諸島の割譲と莫大な補償金（二億兩^{テイル}）を手にしたことは知るとおりである。

しかし、戦勝の狂熱が社会を覆っている、講和条約締結（明治二八（一八九五）年四月一七日）の一週間後、南下の機会を窺い、また東アジアでの権益を守ろうとするロシアは、東アジアの安寧を口実に、フランスとドイツ三国をさそい日本に遼東半島の還付と賠償金の減額を勧告した。当時、ドイツと対立しロシアと軍事同盟を結んでいたフランスは、ロシアの東アジアでの勢力の拡張を望み行動をともし、一方のドイツは、この露仏同盟に楔を打ち込むために参加したとされる。また、日本を、ロシアの南下を防ぐ盾として

利用しようとしていたイギリスは参加を拒み、むしろ日英同盟を結ぶことになる。ここには、ヨーロッパ諸国の政治的軍事的な利害に基づく微妙なパワー・バランスがはたらいっていたのだが、それを拒否するだけの力も外交力もなかった日本は三国の干渉を受け入れざるを得なかった。

この動きを遼東半島視察中に聞き及んだ蘇峰は、「涙さへも出ない程口惜しく覚えた」として次のように回想している。

此の遼東還付が予の殆ど一生に於ける運命を支配したと云つても差支へあるまい。此事を聞いて以来、予は精神的に殆ど別人となつた。而してこれと云ふも畢竟すれば、力が足らぬ故である。力が足らなければ、如何なる正義公道も、半文の価値も無いと確信するに至つた。（蘇峰自伝）中央公論社、一九三五年八月）

「蘇峰自伝」が出版されたのは昭和十（一九三五）年八月。四十年の後のことであるが、三国干渉を自らの劇的な転換点としている。「国民新聞」の論調は、もともと開戦に積極的だったが、いよいよ「国家と一体化した言論・報道を展開」（有山輝雄前掲論文）していくこととなる。蘇峰は「国民新聞」紙上で「吾人は当初よりして熱心なる主戦論者にてありき。少なくとも明治二十七年五月下旬には吾人が日韓清に三国に関する終局の意見は、既に確定したるべき」（「将来に於ける国民新聞の位置」一八九六年一月一日）と述べて憚らない。自伝のなかでも「予は政府に資金を献納する程の力

こと」(傍点引用者)が強調されている。

「臥薪嘗胆」の句は、司馬遷の「史記」「越王勾踐世家」に記された記事に拠るもので、中国の春秋時代、越王勾踐に父を討たれた呉王夫差は薪の上に寝て身体を痛めつけ、復讐の気持ち奮い立たせ雪辱を果たし、一方、破れた勾踐は室内に苦い胆を掲げてこれを嘗め屈辱を忘れないようにしてその仇を報いたという故事による。

こうした敵愾心を煽る「臥薪嘗胆」の語は、政府(第二次伊藤博文内閣)の戦後経営の積極的なイシューとされ、危機を煽り国民を広く糾合するイデオロギーとなっていく。多くの国民もみずから進んでこれに従った。平塚雷鳥(明子)の思い出はその当時の教育現場の雰囲気伝えていて興味深い。十歳のころの教師の思い出にふれながら次のように述べている。

二階堂先生について、忘れたいことの一つは、露・独・仏の三国干渉のため、戦勝日本が当然清国から割譲されるべきであつた遼東半島を熱涙をのんで還付したこと、の次第を、わかり易く、じゅんじゅんと語り、「臥薪嘗胆」を子供心に訴えられたことでした。教室には極東の地図が掛けてありましたが、それはいうまでもなく遼東半島のところだけ赤く塗りつぶしたものでした。話しながら先生が黒板に、特に大きく書かれた「臥薪嘗胆」の文字は今も心に浮びます。(「わたくしの歩いた道」新評論社、一九五五年三月)

後に非戦論を唱えた大杉栄も同様に、遼東半との部分を赤く塗っ

た地図が掛けられ講堂で、「臥薪嘗胆して報復を謀れ」の「報復」の意味が講演されたことを述懐している(「自叙伝」改造社、一九二三年一月)。「忠君愛国」の理念が「家庭にまで入り来り、町内のどんな者にまでも行き亘ったのは、日清戦争中のことであり、戦争が人々の心髄にまでこれを打ち込んだのだった」(「明治大正見聞史」春秋社、一九二六年一月)という生方敏郎の回想は説得力を持つ。蘆花も「富士」で「戦後日本の合言葉」となった「臥薪嘗胆」について以下のように述べ、兄ほどではないが強い関心を示している。

戦勝で危く浮足になつた日本は、ぬうとさし出された露西亞の毛だらけの拳を見て一足退つて身構へねばならなかつた。づう体の大きい支那は存外脆かつた。露西亞は然し別物である。露西亞を相手に、日本はまだ力の不足を感じず。兵も強くせなばならぬ。富も殖さねばならぬ。すべてに成長せねばならぬ。「臥薪嘗胆」の譬語が何時何処からともなく現はれて、戦後の日本の合言葉となつた。(「富士」第一巻)

ただし、この語がスローガンとして鼓舞されたのは日本に限らない。当然、清国の側でも語れていた。藤村道生によれば「下関条約が調印され、その内容が報道されると、清国上下からいっせいに講和条約が苛酷であり、廃棄して再戦すべきだという声があがり、皇帝への上書はたちまち一四〇件にも達した」(「日清戦争」岩波新書、一九七三年二月)という。祖国の危機に際して、山東巡撫で

あつた李秉衡は、講和条約調印の直後の四月十九日、「奏力阻和議折」という書で「但使各將帥有臥薪嘗胆之誠、恢復固非難事」（但ら各將帥をして臥薪嘗胆の誠を有ら使むれば、奪われた地の）恢復は固より難事に非ず」と訴え、また、制度改革を唱道し「公車上書」を認めた康有為は「窃謂經此創巨痛深之禍、必當為臥薪嘗胆之謀」（窃に謂う此の創巨痛深〔創巨きく痛み深い〕の禍を経て、必ず當に臥薪嘗胆の謀を為すべしと）と「積憤」を晴らすべく戦いを継続するように上奏している。

この「臥薪嘗胆」の語は、むしろ、日清戦争を契機に植民地主義的分割の危機が迫っていた中国側で使うのが相応しいともいえる。それは、十九世紀末だけではなく、二〇一〇年の尖閣諸島沖で起こった中国漁船衝突事件以来顕著になり、二〇一二年九月に尖閣諸島（魚釣島）の一方的な日本国有化宣言に際しても中国側で使われたのは記憶に新しい。危機の時代に繰り返し登場し、「史記」に記された呉越の戦い以来の「臥薪嘗胆」の句がもつ物語喚起力に、双方が乗りかかり聞き合っているともいえる。

「不如帰」は、日清戦争直前の明治二十六年五月から二十八年十一月までを物語の時間とし、断続的に明治三十年十一月から三十二年五月にかけて、まさに「臥薪嘗胆」の時代に書かれた。これを抜きにして「不如帰」を考えることはできない。ここでは、人々を戦いに駆り立てた日清、日露の戦間期の時代相を念頭におきながら、「不如帰」を考えていくことにする。

「不如帰」が明治期最大のベストセラーであったのは知るとおりであるが、意外にも新聞連載時にはさほど注目を浴びていたわけではない。むしろ、明治三十年代中期の家庭小説隆盛と相乗して販売部数を伸ばした。明治民法が施行されたのが明治三十一（一八九九）年七月、それによって家族関係のすみずみにまで法律が入り込み、新旧の価値観の対立をはじめ、家庭内での人間関係が小説の新しいテーマとして浮上してきた。愛によって結ばれた男女が、さまざまな障害によって目前にある幸福な家庭に容易に到達できず引き裂かれる。こうしたテーマは、新しい演目を求めていた新派劇の眼目にもそうもので、新派悲劇なるあたらしいジャンルを確立させることになった。明治三四（一九〇一）年に、高田実一座によって大阪朝日座で初演された「不如帰」の上演は、明治末年までに百回になんなんとしていたという。こうした演劇化は単行本の発行部数拡大に大きく寄与し、小説と演劇のメディアミックスによって、それまで一部の書生たちが主な読者であった小説享受層を、女性を含め一般読者にまで押し広げることになった。家庭小説は時に通俗的だとして軽んじられることが多いのだが、小説読者の裾野を広げることにより文学出版産業の成立に大きな役割を果たしたのである。「不如帰」は、時代の好尚に投じたにとどまらず、新しい文学の潮流をも作り上げるプレテクストたりえていたといえよう。

しかし、「不如帰」を「家庭小説」の枠におさめてしまうものにも無理がある。蘆花は明治四十二年二月、「不如帰」が百版を重ねた時に、「第百版不如帰の巻首に」という文書を著し、それを執筆す

るに至った経緯について詳しく回想している。それによれば、この書を著すきっかけになったのは、相州逗子に仮寓している折りに、ある婦人から聞いた話だという。「不如帰」の片岡中将のモデルである、日清戦争では陸軍大臣で第二軍司令官を務めた軍人（大山巖大将、当時中将）の先妻の長女が、同郷で福島県令、栃木県令を務めた人物（三島通庸）の長男のもとに嫁いだ、わずか七ヶ月で結婚を理由に離縁され、二年後には薄命の生涯を閉じたというものである。婦人は涙ながらに、この女性（浪子のモデル）が臨終の折りに、「もうもう女なんかには二度と生まれはしない」という悲痛な声をあげたと語ったという。これを聞いた蘆花は「自分の脊髄をあるものが電のごとく走る」のを感じ、強いインスピレーションに促されるように、二ヶ月後から小説「不如帰」として連載することになる。この部分は下編九の二にあたり、やはり物語の中心的部分になっている。

小説の時間では明治二十八年七月七日の夕べ、赤坂の片岡中将の邸宅には多くの家族たちが集まっている。浪子は駆けつけた伯母の加藤子爵夫人に夫武男への手紙を託し、安堵したところで激しい発作に襲われる。

仄かなる笑は浪子の唇に上りしが、忽ち色なき頬のあたりに紅をさし来り、胸は波うち、燃ばかり熱き涙はらと苦しき息をつき、

「あ、辛い！ 辛い！ 最早——最早婦人なんぞに——生れはしませんよ。——苦しい！」

眉を攢め胸を抑へて、浪子は身を悶へつ。急に医を呼びつ、赤酒を含ませんとする加藤夫人の手に縋りて半起き上り、生命を縮むる咳嗽と共に、肺を絞つて一盞の紫血を吐きつ。憎々として臥床の上に倒れぬ。「下編九の二」

浪子は身悶えながら「あ、辛い！ 辛い！ 最早——最早婦人なんぞに——生れはしませんよ」という怨嗟の声を上げて卒倒する。夫婦愛の賛美という家庭小説が好む定番テーマからすると、あまりに重い運命に対する呪詛のようなことばである。先に引用した蘆花自筆と思われる広告には「明治の齡は三十を超へたれども社会の機織には恐る可き旧習の猶勢を逞ふする」者少なからず」と記されており、社会の「恐る可き旧習」を批判的に問題化しようというねらいが窺える。ここに、「不如帰」が民友社の主導しようとした「社会小説」の試みとしばしば重ね合わされながら評されるゆえんがある。

物語は明治二十六年五月の、伊香保への新婚旅行のシーンから始まる。浪子の父は陸軍中将子爵片岡毅、夫武男は海軍少尉男爵と、人も羨むセレブ婚ながら、浪子には不幸の陰が纏わりついている。母を早くに失い、継母とは心が通わず、結婚を機にやと遠ざかれるも、今度は義母から嫉妬混じりの嫌がらせ（嫁いびり）を受けらる。しかし、浪子はそれに抗することもなく健気にじっと耐えている。その姿が「日陰の花」「夏の夕闇にほのかに匂ふ月見草」と比喩化されることになる。それでも、父の勧めに従った結婚ながら、つかの間の幸せな新婚生活を過ごしていた。その幸せの象徴が、当

時としてはめずらしい結婚指輪——「燦然と照り渡る」「指輪」として表されている。

しかし、翌年の二月に結核に罹ったことで状況は一変する。跡取り息子である武男に病気が移るのを恐れた義母は川島家を維持するために、浪子が逗留で静養中に、また武男も海軍の遠征で留守の間浪子を独断で離縁する。その事実さえも知らないでいた浪子が離縁を知るのは、久しぶりに実家に帰ったおりに、送り返された嫁入り道具を玄関脇の部屋に見出したときである。何も知らぬ幼い妹は姉が家に戻ることを喜んで、「あたし嬉しいわ、姉さまはもう今後始終此家にいるのね。お道具もすっかり来てよ」とつい語り掛ける。そのことが浪子を、はっとさせる。

「エ？」

駭きし浪子の眼は継母の顔より伯母の顔を掠めて、たちまち玄関脇の室も狭しと積まれたるさまざまの道具に注ぎぬ。まさしく良人宅に置きたる吾筆筒！ 長持！ 鏡台！

浪子は戦々と震ひつ。倒れんとして伯母の手をひしと捉へぬ。

〔中編九の二〕

浪子の失望と落胆はひとしなみではない。なんとか離縁の事実を事実として受け容れながらも、病は急激に進んでしまう。武男との手紙のやりとりも叶わず、辛い毎日を過ごし、思い余つて逗留の海に身を投げようとすることもあった。日清戦争の終了後、退役した父と最後の関西旅行に出た帰り、山科駅のホームで神戸に向かう列

車に乗った武男と偶然にすれ違っても、それが今生の別れで、愛する夫と引き裂かれたまま不幸な死を迎えることになる。

浪子は、臨終のきわに、武男から新婚の時に贈られた指輪をさし、「これは——持つて——行きますよ」と伯母に語る。継母に対しても姑に対しても語るべきことは奪われ、徹底して受動的な位置におかれていたヒロインが、唯一自分の意思を表明する場面である。浪子は、物語の構造の上からいえば、父の娘から、武男の妻となり、ふたたび父の娘に差し戻される。男性たちの間を家制度という父性的な原理に従って移動しただけである。しかし、本来離縁されたときに婚家に返すべきもの（指輪）をあの世に持つて行く。現世の論理では叶わぬにしろ、武男の妻のままに死に、来世でこそ結ばれたいという強い〈愛〉への意志のようにみえる。

これに対して、武男は浪子との離縁を母から迫られたとき、家の論理にどう対抗したのか。母は結核という病の伝染によって血縁が途絶え、川島家がつぶれることを恐れ、父の位牌を持ち出しながら「御先祖代々の家を潰す奴は不孝者ぢやなツか」と肉迫する。武男は、浪子を自分の妻のままに死なせたいとして、病気だから離縁するということ「不人情な不義理な事」はできない、「人情に背いて、義理を欠いて、決して家の為には宜い事はありません」と反論する。武男にあっては、母が述べ立てる家の論理に抗するのは「不人情」「不義理」というモラルからである。こうしたゆるやかな社会生活上の行動規範から、母の掬って立つ圧倒的に強固な「家」の論理を押し返すべくもない。

また、この時、夫婦間の絆である〈愛〉ということばが、武男の

口から語られることもない。この時代には、〈愛〉が「家」の論理に対抗するイデオロギーたり得ていなかったというべきか。あるいは、物語展開上の必然として意識的に排されたというべきか。明治二十年代後半以降、「家」の対概念として広がりつつあった、夫婦間の〈愛〉に基づく「家庭」(ホーム)という新しい家族の関係を表す語が、意外にも家庭小説とされる「不如帰」では一回も使われていない。そこには特別な意味があると考えるべきであろう。いずれにしろ、「家」の論理に対抗する論理を持ち得なかったがゆえに「社会」の「恐る可き旧習」に押しつぶされことになった。それが「不如帰」の悲劇をとおく招来しているといえよう。

三

さらに、「不如帰」は「家庭小説」という枠では捉えきれない戦争文学としての特徴も色濃く持っている。むろん、たんに日清戦争を物語の時間軸とし、戦闘の場面が詳細に書き込まれているから戦争文学というのではない。「不如帰」において、「結核」が物語の動力であることは間違いないが、この病は武男との関係を引き裂き浪子を孤立させていくのみならず、戦争をめぐるメタファーと深く結びついているのである。

もともとこの小説にはメタファーが溢れている。冒頭において、浪子は「夏の夕闇にほのかに匂う月見草」と「品定め」され、浪子が伊香保の旅館の一室から眺める「夕景色」に漂う「雲」には、武男と離ればなれになり、終いには消えてしまう運命が隠喩的にイメージ化されている。ここには作中人物の心象風景の描写を超えた

意味が込められていると思われる。こうした表現のありかたは、小説技法としては常套的なことであり、「不如帰」の通俗性の表れと指摘する向きもあるが、題名そのものが「血を吐きながら鳴く鳥」と多分に比喩的であり、意図的にメタファーの連鎖が作りあげられ、それが物語の構成にも食い込んでみるとみるべきであろう。たとえば、中心的メタファーである結核を浪子が自覚する場面は次のように述べられる。

肺結核！ 茫々たる野原にひとり立つ旅客の、頭上に迫り来る夕立雲の真黒きを望める心こそ、若しや、若しやと其病を待ちし浪子の心なりけれ。今は恐ろしき沈黙は已にとく破れて、雷鳴り電ひらめき黒風吹き白雨迸しる真中に立てる浪子は、唯身を賭して早く風雨の重圍を通り過ぎなむと思ふのみ。其にしても第一撃の如何に凄まじかりしぞ。〔中編四の二〕

「結核」を自覚することは、まさに「茫々たる野原にひとり立つ旅客」たる自分を自覚することに他ならない。そして、ここでなされる自然の事象と心的表象のメタフォリカルな表現は、次章の武男と浪子が逗子の「別墅」で嵐に降り込められる場面へとつながっている。こうした浪子に襲いかかる病との戦いの喩は、時代を覆っていた戦争のメタファーともクロスしていくことになるのだ。戦いの喩は、小説のいたるところに見いだすことができる。上編三の二の武男と浪子が伊香保の山で蕨採りに興じる場面、同五の一の赤坂の片岡邸で浪子の弟たちが読書中の父中將に甘えかかるシーン、浪子

の叔母である加藤子爵夫人と継母繁子との角逐、下編二の四でなされる武男の母お慶の、行儀見習いに来ている山木の娘お豊への攻撃など、枚挙に暇がない。なかでも、悪玉としての役割を割り振られた千々岩の心理の動きは、ことさらに強大な武器をもって、悪辣さ深刻さが示される。浪子を武男に奪われたことと、私印偽造の件で武男より辱めをうけたことに対する復讐の念は次のように述べられている。

復讐、復讐、ああ如何にして復讐す可き、如何にして怨み重なる片岡川島両家を微塵に吹き飛ばす可き地雷火坑を発見し、成る可く自己は危険なき距離より糸をひきて、憎しと思ふ輩の心傷れ腸裂け骨掛け脳塗れ生きながら死ぬ光景を眺めつ、快よく一盃を過ぎむか。「中編四の一」

千々岩は悪玉としての役割を十分に引き受けている。悪玉は悪玉らしく善玉に理不尽な戦いを挑みかけようとする。具体的には「結核」をネタに武男の母をけしかけ、浪子と武男を引き裂こうとするのだ。比喩的にいえば、悪玉の千々岩と「結核」の〈悪〉が手を組んで、か弱き浪子に襲いかかることになる。結核をめぐるメタファーは、千々岩の理不尽な復讐〈悪〉と結びつくことによつて、いよいよ猛威を揮い浪子を押し潰すのである。のみならず、それは邪悪で卑怯な「清」と、正々堂々と闘う正義の「日本」という日清戦争の構図へ容易にスライドされ、重ねられることになる。こうした意識は繰り返される「征清」という語にすでに認められるのだ

が、黄海の海戦において、敵艦である清の艦船「定遠鎮遠」が「己み難き嫌厭と憎悪」の念とともに形象化されることにつながっている。語り手は二重三重の意味で、〈善〉と〈悪〉との戦いの物語を引き受けようとしているのである。ここに戦争をめぐるナラトロジーの持つ問題性の一端をうかがい知ることができる。それは、まさに悪は悪らしく善は善らしく語る語り手の語り口に表われているといえよう。このような、世界をあらかじめ善悪に二分化して語る語り、しかも作中人物たちをして境界を越境させない語りは、まさに勧善懲悪小説の構図にも近い。

ならば、この小説において善がすべからず勝利をおさめているといえるのか——。結核に冒され、武男とも離縁させられ、死んでいく浪子の姿を思い浮かべれば、単純に善が悪をうち負かしているとは言いがたい。先行する結核をめぐる小説、広津柳浪の「残菊」（明治二二（一八八八）年）——夫婦の愛によつて結核が治癒する——とも異なる。また、最後には予定調和的に美德が勝利し、夫婦愛が賛美されるといふメロドラマ的なあるいは家庭小説的な期待も裏切っている。むしろ、逆らえない運命（病魔）に滅ぼされるという意味では文字通り〈悲劇〉的である。浪子の避けがたい死が視界に入ってきた下編にいたると、語り手は敗れるものの側から語る。それがいよいよ悲劇的に語り出す。しかも、敗れるものの側から語る。それが「不如婦」のモチーフであったことは間違いない。ならば、なぜこうした分かりやすい悲劇的な浪子の死をもって小説を閉じることができなかつたのか。

スーザン・ソントグは、結核をめぐる歴史的メタファーを論じ「結核の場合、外にあらわれる熱は内なる燃焼の目印とされた。結核患者とは情熱に、肉体の崩壊につながる情熱に「焼き尽くされた」人とされた」(「隠喩としての病」富山多佳夫訳、みすず書房、一九八二年)と述べている。浪子も、山科駅での武男とのすれ違い以来強まった、夫への思いゆえにさらに消耗し燃え尽きようとしている。まさに結核という病をめぐるロマンチックな物語に身を委ね、冒頭の隠喩にもつながるヒロインにふさわしい悲劇的な最期を迎えんとしている。父、継母、妹、伯母、下女の幾、そして清子など主要な人物が一堂に会するという、申し分のない大団円的な(終り)がここにある。しかし、浪子の死をもつてもこの小説は終れない。浪子の死だけでは背負いきれないエネルギーが残っているからである。

物語の内容に即せば、やり場のない怒りと悔恨に苛まれている武男の思い、片岡家からも息子からも和解を拒否されたお慶の感情、娘の無念の死を悼む父親の気持がそれである。いわば仕掛けられた物語のエネルギーが燃焼し尽くされてはいないのだ。大団円的な(終り)を指摘したとするならば、なおのこと燃っている物語の残滓が意識される。また、征清戦争を勝ち抜きながらも、三国干涉(明治二十八(一八九五)年四月)の恥辱のまっただ中にある読者が共有している、(善)と(悪)の戦い——国家間の利害の衝突による敵と味方の戦いではなく——という戦争のメタファーのエネルギーからしても、善なるものが悪なるものによって打ち負かされたまま物語が閉じられることはありえない。ヒロイン浪子の死は何ら

かの形で贖われなければならない。そこで改めて戦争をめぐる想像力が必要となってくる。

蘆花は「不如帰」の終りについての回想のなかで、「武男は死んではならぬ。武男は生きねばならぬ。生きる力は、何処から湧く?」

男を男にするには、女の愛の外、更に男の力を要する」(「富士(第二巻)」福永書店、一九二六年)と述べている。武男を「男にする」とは——それは、妻を二重の意味で失い世をはかんでいゝる、いわば女々しい気持からいち早く脱するために、武男に「男児」として「軍人」として生き直す契機を与えることに他ならない。そのためには「女の愛の外、更に男の力を要する」とされる。ここに家同士が絶縁していながらも、武男と片岡中将が男と男、いや、軍人と軍人として和解する理由がある。

浪子の悲劇的な死の四ヶ月後、日清戦争が終結し帰国した武男は青山墓地にある浪子の墓を訪れる。加藤子爵夫人から受け取った浪子の絶筆を読み涙している武男は、思いがけず浪子の父子と遭遇する。驚いた武男は、浪子の遺書を持ったまま、涙を払って、墓門に立った片岡中将と顔を見合わせる。武男の手を無手と握った片岡中将は、やはり涙を払いつつ、次のように語りかける。

「武男さん、わたしも辛かった! (中略) 武男君、浪は死んでも、わたしは矢張(やっばい)の爺(おや)ちや。確(たし)か頼(たの)みますぞ。……前途(と)遠(と)しちや。何も男児(おとこ)の心胆(こころ)を錬(あ)るのぢや。……あ、久し振り、武男さん、一処(いっしょ)に行つて、寛々(かんかん)台湾(たいわん)の話でも聞かふ!」

〔下編十の二〕

浪子の死は新たな戦いを挑む男同士（陸軍中将と海軍少尉）を和解に導く。娘であり、妻である浪子こそが、義絶した二人の軍人を結びつけることができるのだ。そこに、浪子を媒にして両者があらためて父子関係のアナロジーをもとに語り直される意味がある。これによって、病魔に敗れた浪子の死は、戦争遂行を肯定する機能を担わせられると同時に、一転して受け容れるべき勝利の表徴に転化できる。そう語ることによってしかこの小説は終れなかったのだ。浪子の死は単なる病死ではない。戦争と「家」とに翻弄された浪子の悲劇的な死は、男たちを新たな戦いに駆り立てる意味ある死に祭り上げられなければならなかったのである。

山下悦子は「マザコン文学論」（一九九一年）で「和解するラストシーン」は、「家」を媒介にした窮屈な形式的人間関係にピリオドを打つ、明治的なものの終焉を暗示していた」と述べるが、そうとは言い切れない。むしろ、国民を新たな戦いに駆り立て、戦争の継続を国家経営のイシューとする「臥薪嘗胆」の時代の想像力と深く関わっていたといえるべきだろう。「不如帰」はこの意味でこそ「戦争文学」ということができる。ここに近代日本文学の中でも稀有な、戦間期の文学とされる「不如帰」の独自の位置があるといえよう。

四

われわれは、さまざまな危機に取り囲まれている。最近ではヨーロッパの通貨危機、ギリシャ・イギリスのユーロ離脱の危機、イス

ラム諸国の政治体制の危機、日本においては強権政治によるメディア統制の危機、平和主義の危機、また、人間による自然破壊の危機、さらに人間の力では統御できない迫り来る自然災害の危機、その上、個人の健康上の危機も考えれば枚挙するに暇がない。

そもそも、危機はどういう場合に意識されるのか。それまで通じてきた原理や、集合体の統一性・一体性が何らかの理由で損なわれ、新しい状態に移行しようとするときに生じると考えられる。障害が起きている部分を、治療・修復を目指すという意味では、前向きな問題認識ともいえる。

一方、意図的に作られた危機もありえる。ある共同体・集合体を糾合しようとするとき、また、当面の大きな問題から目を逸らせるために、あるいは、政権の基盤の強化のために危機が作られてきたことは、国際政治、国内政治を問わずよく見られた光景である。こうした危機の時代には、時に神話的ともいえる大きな物語が発動する。宗教的、道徳的な価値を実現するために反対勢力を駆逐しようとする戦い、たとえば、テロを撲滅し「自由」と「民主主義」の実現・維持という〈善〉を実現し、〈悪〉を滅ぼすためには武力（暴力）もやむなしというイラクにしかけられた戦争は、多分に〈善〉と〈悪〉をめぐる説話論的な物語に拠っている。それを振り払う側も、十字軍に反撃するという歴史的な物語に依拠している。ここで取り上げた「臥薪嘗胆」という時代認識も司馬遷の「史記」以来の物語的想像力に負っていることは言うまでもない。

危機の時代にこそ、そうした社会に遍在する物語がにわかに浮上し、われわれを呪縛し行動に駆り立てる。そうした物語に絡め取ら

れないためには、自分を取り巻く物語を批判的に受け止める能力が必要となる。自分の目で見て考える思考力と想像力を鍛えあげておかなければならない。そこに文学的構想力の存在意義がある。

むろん、文学によって危機が回避されたり、危機が乗り越えられというようなことは簡単にはありえない。過剰な期待や幻想を抱くこともできない。また、文学作品の成り立ちからいっても、出来事の後で事後的に創作されるものであり、そこにはタイムラグがあり、即現実を反映するものでもない。

しかし、なし崩し的に国民的理念が解釈変更され突き崩されていくこの時代に『不如帰』を読み返すと、さまざまな形で繰り返される「危機」の一つの相貌が浮かび上がってくる。「危機」はわれわれの想像力とともにある。過去に書かれた遺産のなかにこそ、現代を考えるヒントがあるのではないだろうか。

注一 有山輝夫『明治期における『國民新聞』と徳富蘇峰』（日本図書センター、一九八八年三月）

付記 『不如帰』の引用は明治三十三（一九〇〇）年一月に民友社から出版された単行本による。なお、本論は、共立女子大の公開講座「危機の時代に文学を問い直す」（於共立女子大学八王子キャンパス、二〇一二年一〇月二七日）で発表した内容を元にしていて、論の展開の上で拙稿「解説」（『不如帰』岩波文庫、二〇一二年七月）に重なる部分があることをお断りしておく。